

(ちば経済トレンド)

夏休み期間中（7～8月）における千葉県の観光宿泊者は、個人客がほぼ震災前の水準に戻ったのに対し、団体客や外国人旅行者の戻りは依然鈍い

当社が9月初に千葉県内の宿泊・観光施設等へのヒアリング調査（県内ホテル、旅館、海の家、観光施設等合計22先）を実施した結果、夏休み期間中（7～8月）における県内の観光は、県内や関東地方からの個人客は震災前の水準にほぼ戻ったが、関東地方以外からの個人客や臨海学校などの団体客、外国人の戻りが依然鈍いこと、などがわかった。

ホテル・旅館などの宿泊施設の客室稼働率は、80～90%まで戻った先が多かったが、水準はなお前年を5～10%程度下回ったほか、地域によりばらつきがみられた。

- －千葉市内から浦安地区のベイエリアでは、8月のTDR入場者は過去最高（数字は未公表）を記録したものの、周辺ホテルへの宿泊者の戻りは今一步で、客室稼働率は前年の▲10%減となった先が多かった。千葉駅周辺ではビジネス客の戻りから前年を上回る先もみられた。一方、中国人客依存度の高いホテルでは前年を大きく下回った。
- －成田地区のホテルは、客室稼働率が前年比▲10%減となった先が多かったが、7月の成田祇園祭は来場者が48万人（前年比+3万人）と、参道周辺は賑わいが戻った。
- －関東地方の梅雨明けが例年より早い7月上旬であったにもかかわらず、南房総や九十九里浜の海水浴場は、海水浴客が前年比半減した先が多く、なかには売上が同▲80%と大幅に減少した海の家もあった。犬吠埼周辺の宿泊施設では客室稼働率が同▲40%減となった先もみられた。南房総地区の宿泊施設は、同▲10～20%減となったが、海水浴客が半減した分、大型プールを有しているホテルに人気が集まった。

自粛の一巡や消費マインドが持ち直しつつある中で、今夏の県内観光を押し上げる力強さが乏しかったのは、団体宿泊予約は3ヶ月前に確定するため、既にキャンセル済であったこと、津波、放射能への不安が払拭されなかったことが主因とみられる。

3ヶ月前の団体宿泊予約をみると、南房総地区では前年を▲20%程度下回っている先が多いが、なかには同▲40%減の先もある。しかし観光関連業者のなかには、夏場の個人客の戻りに手応えを感じ、来春の花の観光シーズンには例年並の客足が戻るだろうと、秋から冬のシーズンオフを乗り切り事業継続に意欲を見せている先もみられた。

千葉県内の観光が震災前の状態に戻るには、原発事故が早期収束すること、各自治体や観光関連業者が連携して災害時を想定した安心・安全な観光地区・施設への見直しを進めるとともに、来春につなげる観光キャンペーン活動や、新規顧客、中国人以外の観光客への開拓などの検討に取り組むこと、などが重要と思われる。（井上）

